

<研究成果の紹介>

# イチゴ新品種「サンチーゴ」の品種特性と栽培管理技術

園芸グループ

## 1. 成果の内容

農業技術センターでは、炭そ病抵抗性を持った促成栽培用イチゴ新品種「サンチーゴ」を開発し、平成11年11月に出版公表されました。現在、三重県下で普及しつつあります。ここでは「サンチーゴ」の品種特性と、栽培管理上の要点について紹介します。

### 1) 「サンチーゴ」の品種特性

(1) 病害抵抗性  
「サンチーゴ」は「宝交早生」と同等の炭そ病抵抗性を持っています。ただし、萎黄病抵抗性は高くないので注意が必要です。

(2) 生育特性  
親株床でのランナー発生開始は「女峰」よりやや遅れますが、本数は「女峰」より多く発生します(表)。また、高温期にランナー先端が枯死しやすく、十分なかん水が必要です。主根の発生本数は「女峰」に比べて多く、吸肥量も多く、草勢は「女峰」と同じ程度です。

(3) 早晩性  
花芽分化開始時期は「女峰」に比べ5日程度遅いため、収穫開始は2週間ほど遅くなります。

(4) 果実特性  
果皮は、光沢が優れた明赤色で明るく、果実硬度は「女峰」と同程度に硬いのですが、春先に硬度の低下がみられます。食味はさっぱりした甘みがあります。果実障害には、頂果にみられる縦溝と空洞、多肥条件下で発生するがく枯れなどがあります。

(5) 収量特性  
平成9年の現地試験の結果では、4月末までの収量は、「女峰」対比で108~141%と、全ての農家で「女峰」よりも多く、平均24%の増収となりました。果重が大きいため、その分の増収が期待できます。

### 2) 栽培管理技術

(1) 親株管理  
「サンチーゴ」は炭そ病には抵抗性がありますが、萎黄病には罹病性であるので、親株床は必ず土壤消毒し、ガス抜きを徹底

します。

(2) 窒素中断時期と花芽分化  
花芽分化は、通常のポット育苗では、育苗中の葉柄中窒素濃度の低下は遅く(図)、花芽分化は「女峰」より5日程度遅れます。花芽分化後定植が遅れるようであれば、薄い液肥を施用します。定植は必ず花芽分化確認後に行う必要があります。

(3) 施肥管理  
無機成分の吸収量は「女峰」より高く、吸肥力が高くなります。そのため、施肥においては、基肥等は慣行より約20%減肥し、生育に応じて調整する必要があります。

(4) 定植後の管理技術  
定植時の株間は20cmを基準とし、定植後は少量多回数かん水を徹底します。脇芽が発生したら早めに除去して1芽にし、開花始めに再度腋芽を摘除し、その後発生する弱い腋芽は摘除します。温度管理は、ビニル被覆は早すぎないように10月20日~25日頃を目安とし、草姿は開花時、草高18cm程度、葉長21cm程度を目安とし、徒長させないように注意します。保温は最低夜温が10℃を下回る頃には行い、日中の温度管理は開花までは最高28℃、着果から白色まで25~27℃、着色始めから女峰よりやや低めの22~25℃を上限とし、高温管理にならないよう注意します。最低気温が10℃以下となったら内張カーテンを行い、夜温確保に努めます。電照は11月10日~15日頃から行います。

### 2. 技術の適用効果と適用範囲

経営規模の大きなイチゴ栽培農家の作型分散や炭そ病の発生の多いイチゴ農家に適します。

### 3. 普及・利用上の留意点

萎黄病、うどんこ病の防除を徹底して行い、空洞果の発生を抑えるため多肥を避け、春先は果実の軟果を防ぐため、カルシウム剤の散布が有効です。

(田中 一久)

表 ランナー、子苗発生数調査

品種名	ランナー数(対女峰比)	子苗苗受け数(本)
サンチーゴ	24.3本(177%)	40.3本(129%)
三系5	13.0(95)	13.0(42)
とちおとめ	28.0(204)	33.0(105)
ファーストレディ	13.0(95)	27.0(86)
女峰	13.7(100)	31.3(100)

注) ランナー調査7/16(数字は親株あたり)

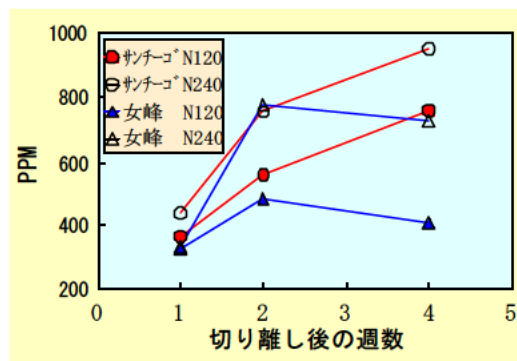


図 育苗中の施肥量が葉柄中硝酸態窒素濃度に及ぼす影響